

寄せ蛾記

埼玉昆虫談話会

YOSEGAKI : Saitama Konchu Danwakai

古利根川流域 — 久喜、幸手・杉戸 —
の蝶覚え書 (2)

松井 安俊
松井 英子

タテハチョウ科

22. アサマイチモンジ

次種とほぼ同様の発生経過をとり、年2化または一部3化とみなされる(図10)。分布は局地的であるといわれ¹²⁾、当地でも成虫はスイカズラの茂る屋敷林・2次林の林縁や開けたかん木の間に限って見られ、食草の分布により制約をうけているようだ。次種と混生するが、当地ではむしろ本種の方がやや多い。

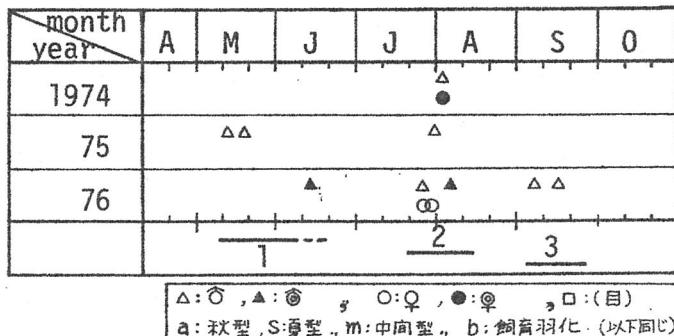


図10 アサマイチモンジ

23. イチモンジチョウ

採集記録を図11に示す。前種との生態上の比較は十分になされていないが²³⁾⁸⁾、♂が占有性を示し、他種(コミスジ、ゴマダラチョウ)を追飛するのを認めたことがある。

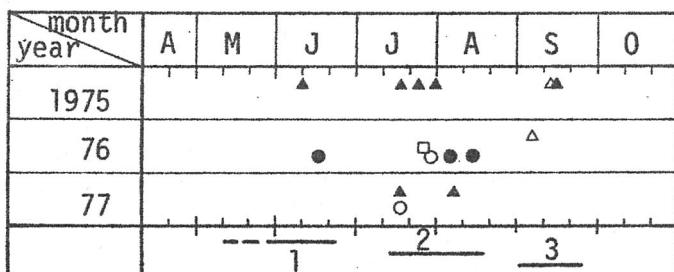


図11 イチモンジチョウ

24. コミスジ

本州中部では年2~3化²⁾、あるいは2化と3化の混合³⁾とされているが、当地では第1化が4月下旬~5月、第2化は7月~8月中旬、そして第3化は9月にみられる(図12)。

(8) 前記2種と類似の環境にみられるが、食草選択は広く、分布もやや広範囲である。

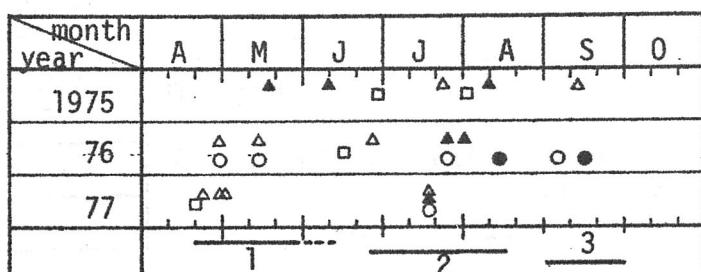


図12 コミスジ

♂に弱い占有性がある。

25. キタテハ

6月初めから第1化(夏型)が発生、続いて7月中～下旬に第2化の羽化をみる。8月から9月にかけて第3化を生ずるが、これが秋型とかさなる。第3化の一部は、夏期の気候の影響で季節型決定

因子の臨界付近での変動が生ずるためか、9月中旬頃に中間型としてあらわれることがあるが、9月末～10月以降の羽化では秋型となる。中間型の一部は、秋型とともに成虫越冬するようだ。

図13および藤岡の解説⁴⁾などから、年4化と推定した。

古利根川岸などの陽地のカナムグラ群落でおびただしい数の発生がみられ、ヒメジョオン、カムグラ、ニラ、コスモスなどに訪花、樹液や熟果、ゴミなどにも集り、おう盛な生活ぶりを示す。

26. ヒオドシチョウ

16-VI-1976, 1♂, ○, 杉戸町下野, /例のみ。

27. ルリタテハ

クヌギの樹液にみられるが少ない。17-VI-'75, lex. ○, (目), 8-VII-'76, lex. ○, (目), , 29-VII-'76, 1♂・1♀, △, , 3-X-'76, 1♀, △, 13-X-'75, lex. ○, (目), 第1化の記録は欠落している。

28. ヒメアカタテハ

9-XI-'74, 2exs. ○, (撮影)。この記録以後3年間一度もその姿を見ていかない。最近いわれていることだが、⁴⁾⁵⁾当地でも宅地化のため激減した。

29. アカタテハ

29-VII-'76, lex. ○, (目), 3-XI-'76, lex. ○, (目)。いずれもクヌギの樹液に飛来したものである。記録が少なく発生状況は不詳である。

30. コムラサキ

6月と7月中旬～8月上旬との年2回発生(図14)だが、部分的3化の可能性はある。水田や川岸のヤナギ類に発生、個体数も少くない。樹液によく集り、♂は羽化する♀を求めて食樹のまわりを活発に飛しょうする。

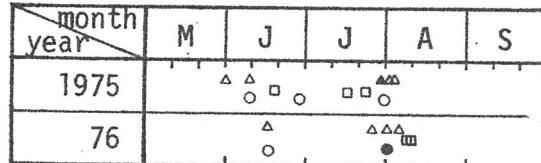


図14 コムラサキ

31. ゴマダラチョウ

5月中旬より6月にかけて第1化、7～8月に第2化がみられ、一部は9月に3化となることがある(図15)。林縁のエノキに発生し、個体数も多い。

生態については別報を予定しており、ここでは省略する。

ジャノメチョウ科

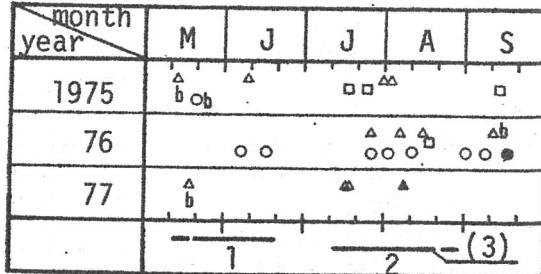


図15 ゴマダラチョウ

32. ジャノメチョウ

♂は7月中旬から、♀はこれに遅れて9月下旬から、それ羽化し、♀は9月に入っても汚損個体をみる(図16)。古利根川畔のススキ群落に局的に発生し、これに接するアカマツーコナラ林の内部にも拡散する。成虫はブッシュなどの葉かけにひそみ、人が近づくと敏感にとび出し、再び近くのしけみに入る習性がある。また、♂、♀ともに樹液に集まる。

33. ヒカゲチョウ

6月下旬～7月中旬、9月中旬～10月上旬の年2化と推定される。26-VI-’75, 1♂, ○, 17-VI-’77, 1♂, △, 15-XI-’76, 2♂♂・2♀♀, ○～◎, 6-X-’74, 1♀, △。個体数は多くない。

34. サトキマダラヒカゲ

図17に採集記録を示す。5月下旬よりの第1化と、7月下旬～9月上旬の第2化を認める。

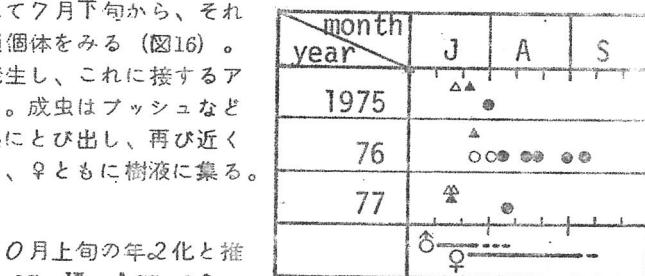


図16 ジャノメチョウ

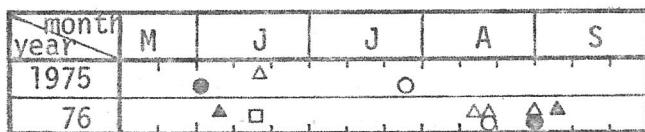


図17 サトキマダラヒカゲ

35. ヒメジャノメ

年2化で、図18のような消長を示すが、18-X-’76, 1♀, ◎の例は遅い記録である。

越冬態は幼虫(3～5令)だが、20-VI-’75に青毛堀川岸のカラスムギに終令1exを見

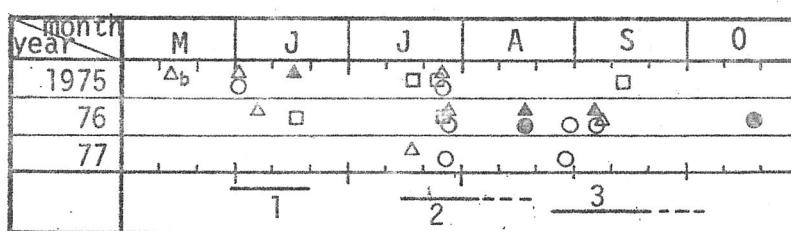


図18 ヒメジャノメ

出し、これを飼育したところ(蛹化1-V)、13-V-’75, 1♂が羽化した。

セセリチョウ科

36. ダイミョウセセリ

環境からみて少ない種とは考えられないが、記録は以下のように少ない。25-VII-’76, 1♂, ○, 27-VII-’75, 1♀, ○(目)。

37. キンイチモンジセセリ

古利根川畔のススキ群落に局的に発生するが多くのない。市川・原(1978)⁵⁾によれば当地では

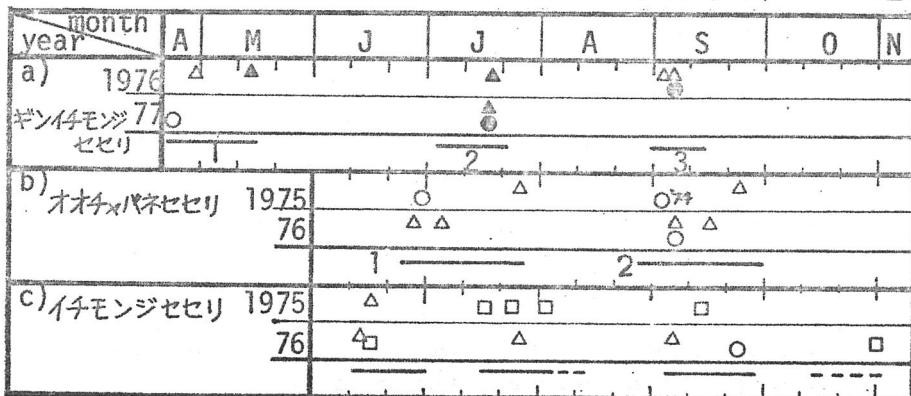


図19 3種のセセリチョウ類

未記録であり、藤岡(1975)⁶⁾でも分布図にプロットされていないので、はじめての記録であるらしい。発生は4月下旬から5月中旬に第1化、7月中旬を中心に第2化、そして第3化が9月上旬となっている(図19-a)。

38. キマダラセセリ

16-VI-'76, 1♀, ○., 20-VI-'76, 1♂, ○., 27-VI-'76, 1♂, ○. の3例を得ているが、第2化は確認できず、発生状況ははっきりしない。

39. オオチャバネセセリ

図19-bには年2化を推定したが、あるいは年によって第3化を生ずるのかもしれない。

40. ミヤマチャバネセセリ

12-V-'75, 1♀, ○., 29-VI-'74, 1♀, ○. いずれも杉戸町下野の川岸で得ており、それぞれ、1化、2化の個体である。少ないながら発生しているようだ。

41. イチモンジセセリ

5月下旬には発生しているのかもしれないが、6月中旬から第1化を記録し、以後、7月中旬・8月上旬、9月および10月と個体数を増すようだ(図19-c)。

以上41種について記載したが、冒頭の意気込みとは裏腹に、普通種といえどもその個体数、季節消長さらに生活史などを実際には握ることがやさしいことではないことを痛感する次第であるしかし、それでも、本報が、ひとつには、これまであまりまとまった記録のない地域で3年間採集観察を行った記録であることに若干の意義はあるのではないかとは考える。

なお、図にプロットした記録に関する標本は、ほぼすべて筆者らが保管している。

(完)

参考文献

- 1) 横山光夫・若林守男(1971) :原色日本蝶類図鑑(増補・夕刷)、保育社、大阪、p 42.
- 2) 福田晴夫他(1972) :原色日本昆虫生態図鑑(Ⅲ, チョウ編)、保育社、大阪、p 219.
- 3) 林慶二郎(1951) :日本蝶類解説、日新書院、東京、p 66.
- 4) 藤岡知夫(1972) :図説日本の蝶、ニューサイエンス社、東京。
- 5) 市川和夫・原聖樹(1978) :埼玉県の蝶類、(「埼玉県動物誌」埼玉県教委、所収)。
- 6) 藤岡知夫(1975) :日本産蝶類大図鑑、講談社、東京、p 10.
- 7) 白水隆・原章(1960) :原色日本蝶類幼虫図鑑、Vol. I. 保育社、大阪、p 37, p 132.
- 8) 信州昆虫学会(1977) :信濃の蝶、IV. タテハチョウ科、信学会、長野。

(千葉県柏市根戸427-5, 北柏第2住宅3~102, T-277)

記録の訂正

本誌No. 16(1976年1月20日発行)に、筆者が「奥秩父の蝶に関する資料 その2」として発表した記録のなかで、重大な同定の誤りがあったので、以下のように訂正する。

誤 ハヤシミドリシジミ '75-VII-18, 1♂ 大滝村お清平。

正 エゾミドリシジミ '75-VII-18, 1♂ 大滝村お清平。

以上、碓井徹(1976)奥秩父の蝶に関する資料 その2, 寄せ蛾記(16) : 97-102.

これは今年1月1日にわが家へ遊びに来られた、本会々員の原聖樹氏と松本和馬氏の両名が、標本を見て指摘されたものである。この記録を引用した文献は筆者の知る限り次の3つである。

(1) 市川和夫(1976) 埼玉県では採集例の少い蝶の1975年における記録、寄せ蛾記(17) : 120.

(2) ——・原聖樹(1978) 埼玉県の蝶類、埼玉県動物誌 : 259-298.

(3) 加藤輝年(1978) 秩父、武甲山の蝶(2), 寄せ蛾記(24) : 196-198.

引用された方々には迷惑をおかけし、また多くの方に間違った記録を提出してしまい、まことに申しわけなく思います。ここに、おわびして訂正します。 (碓井徹)

モンキアゲハは埼玉県に土着するか

碓井 徹

モンキアゲハが埼玉県に土着しているか否かは、機会あるごとに論じられている話題ですが、現在までのところ、県内では野外において連続的な発生は確認されていないので、「土着している」とは言えないわけです。しかし、多くの同好者との会話の中には「土着しつつあるのではないか」というニュアンスの発言も多く聞くことができます。

私は、昨年の春まで、石川県金沢市に5年間住んでいたのですが、そこではモンキアゲハが多産し、本種の生態や分布について若干の観察をし、いくつかの文献を手に入れることができました。これらの資料から、埼玉県にはモンキアゲハが土着しているか、しつつあるのか、といった事について少し述べてみたいと思います。

1

まず、日本国内における本種の分布を描いた図（藤岡 1975）を見ると、本州では日本海岸から太平洋岸までべったりと分布しているのは若狭湾と伊勢湾を結んだ線より西の地域で、そのあたりより東では、日本海側では福井ー石川ー富山ー新潟の各県の海岸沿いに（正確に言えば、海岸に近い丘陵地という表現が適切と思うが）、太平洋側では愛知ー静岡ー神奈川ー（東京）ー千葉の各都県のやはり海岸沿いに細長く分布を延ばしてきていると言えるでしょう。そして、その細長い分布帯にはさまれた地域に、土着と判断しかねる目撃記録や採集記録が数多く見出されるわけですが埼玉県でも1950年以後の本種の目撃・採集記録は50例を越えるようです（市川 1973）。

しかし、これら県内の記録のほとんどが、同時に2頭以上の目撃や採集をしたものでないこと、シーズンに行けば毎年確実に本種を見ることが出来るという場所がはっきりしていないことが、発生地の見当をつけるうえで大きな障害となっています。ちなみに、同時に2頭以上記録した例では、私が1965年8月に名栗渓谷で、路上で吸水中の♂を採集し、その後に訪花している／頭を目撃した例（採集品は県立浦和高校に保管されている）

があり、市川（1973）は、宝登山附近では毎年夏に、必ず本種が見られることを指摘しています。

2

1973年の春、金沢大学に決まった時にまず頭に浮かんだことは、「寒い所へ行くのだ」という事でした。蝶相も埼玉とはかなり違うことを予想していたのですが、金沢へ行ってまず最初に採集したのはなんと、ウラギンシジミの越冬個体でした。少しほは北寄りの蝶が採れるものと期待していたあがはずれて、4月中旬にはアゲハチョウが飛び、下旬には驚いたことにモンキアゲハをかなりたくさん見ることができました。飛び交う春型のモンキアゲハをながめながら、なぜこんな雪の多い土地ですら土着しているのに、埼玉県には土着していないのか、と考えざるを得ませんでした。

ここで北陸地方のモンキアゲハについて、主に1973年から5年間にわたり金沢大学構内の植物園で観察したことを、埼玉県の場合とからめながら述べてみます。

北陸地方の低地では、成虫が姿を見せるのは年によって若干のずれはあるものの、だいたい4月下旬から5月中旬までで、断言はできませんが年3化と思われます。観察地である植物園は、園内を縦断する小道をゆっくり歩いても10分程しかからない小規模なものですが、この小道の両側にはカラタチが植え込まれ、園内にカラスサンショウの大木が数本あるために、これらを食樹とするPapilio類を採集したり観察したりしていて、特にモンキアゲハについて気がついた事が2つありました。

ひとつは、カラスアゲハやクロアゲハなどに比べてモンキアゲハは世代交代の時期が明りょうでない、という事です。前2種や他の蝶も一般的には飛しょうしている個体の汚損変や個体数の増減から第1化から第2化への移行、あるいはそれ以後の世代交代の時期がつかみやすいのに比べて、金沢で観察したモンキアゲハはダラダラと羽化をし続け、いつでも新鮮個体が飛んでいると言っても過言で

ないような発生のしかたでした。

もうひとつは、これは埼玉県のモンキアゲハを考える上で大きな要因となる事だと思うのですが、モンキアゲハと食樹であるカラスサンショウの結びつきが非常に強い、という事です。園内には多数のカラタチが植えられ、その上を本種を含むたくさんのPapilio類が飛び交うにもかかわらず、モンキアゲハはカラタチに興味を持つような素振りを一度も見せませんでした。そのかわり、園内に数本あるカラスサンショウの梢には、産卵する♀や飛び回る♂をいつも見ることができました。

野生のカラスサンショウを、私は金沢に行って初めて見たのですが、北陸地方ではさほど珍しい植物ではなく、海岸付近の低地から（海岸付近と言っても、沖積平野にはほとんど自生しない）標高400mほどの低山地まで普通に見られます。モンキアゲハとカラスサンショウの強い結びつきを見るにつけ、私は、北陸地方にこの南よりの蝶が普通に見られるのは大好物の食樹が普遍的に分布しているからだと考えてしまいます。

それと同時に、埼玉県におけるモンキアゲハの現状は、食樹の貧弱さが原因ではないかと思っています。関東地方におけるカラスサンショウの分布を詳しくは知りませんが、少くとも埼玉県内ではかなりまれなようで、手もとにある文献では、入間の有間谷が自生地であることを指摘しているのみです。おそらく有間谷以外にも自生地はあるでしょうけれど、県内にこの植物が少ないことは確かなようです。

3

太平洋岸をカラスサンショウに依存して分布を延ばしてきたモンキアゲハは、三浦半島あたりから関東山地の東縁に沿って、やはりこの食樹に依存して内陸部へ侵入して来ていると私は考えています。そして、埼玉県のように食樹のまれな地方では土着しているようなしていないような、すなわち、母蝶がカラスサンショウにうまく行き当たったら次世代が生まれる、といった不確定な状況が続くと思われます。逆の言い方をすれば、県内にカラスサンショウがある程度まとまって自生している土地があるとしたら、そこにはすでにモンキアゲハが土着している可能性が強いと思います。

ここまで話を進めてくれば、当然、食樹の転換について考えねばならないのでしょうかけれど

この問題はもっと調査、勉強してから考えてみたいと思います。

ここで、分布を拡大してゆく方向にカラスサンショウが豊富に自生していれば本種が土着する、と考えられる例として、富山県におけるモンキアゲハの分布に関する文献を、一部原文のまま抜粋し、2、3提示します。

◎大野 肇 (1956) 富山県の蝶についての考え方 NEOZEPHYRUS 3.

……略……その他に記すべきことはモンキアゲハの本県における個体数のことですが、高岡市の二上山に多産することは諸氏の既知のことだと思いますが、私の知っている範囲では最初から今日の様に多産していたのではなく、今から二、三年前は一日に一頭若しく二頭も採れば良かったくらいにめずらしかったものですが今日では一日に二十頭ぐらいは採れるでしょう。又小池さんの話してもわかるように氏の幼い頃は全然見ることの出来なかつたことは確かで、これはアゲハチョウの北上を物語っているものであります。……

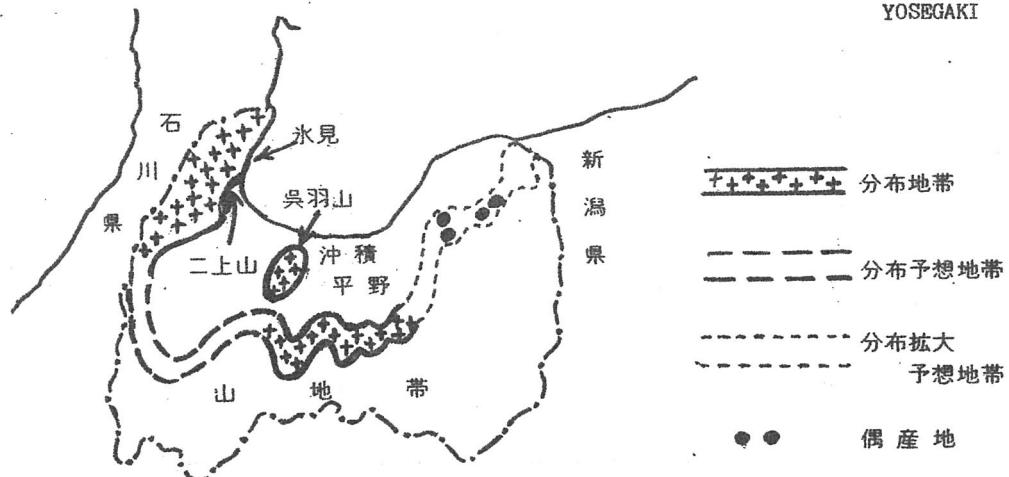
……後略……。

◎田中忠次 (1966) 越中の昆虫 北陸の自然

……略……本県は吳羽山を境としてそれより東側を吳山以東略して吳東、西側を吳山以西略して吳西と呼んでいるが、吳西には吳東より暖地性の昆虫が多い。特に水見地方にはモンキアゲハを多産し、ウチワヤンマもすんでいる。モンキアゲハは昭和22年に氷見で発見されてから続々と新産地がわかってきた。現在は氷見地方に最も多く、小矢部市の山地にも多い。また高岡地区・吳羽山にも希でない。最近は吳東にも産地がふえており、そのすみ場所をだんだん広げているものと思われる。……後略……。（田中氏によるモンキアゲハの分布の推定については次ページの図を参照されたい。）

また、金沢近郊にある山の標高400mあたりの中腹で山小屋を経営している昆虫をよく知っている人から、私は2年前に次のよう話を聞きました。

「モンキアゲハは、この山小屋の周囲では夏だけ姿を見ることができるが、今年（1977年）は春が早かったせいか珍しく5月下旬にノ匹、山小屋の中へ飛び込んで来た。」



モンキアゲハ分布推定図（田中 1966 碓井 補筆）

4

かなり散漫な文章になってしましましたが埼玉県におけるモンキアゲハの土着という問題を考えるには、以上のような観察、文献等から、また藤岡(1975)も指摘しているように、カラスザンショウの分布をまず考えねばならないと思います。

そして、この食樹の分布がモンキアゲハの分布を限定する唯一の要因だとしたら(私はそう思うのですが)、県内で発見されてから30年にもなる現在も土着していると明言できない現況は、富山県の例などから考えても埼玉県内にカラスザンショウが少ない、という事実が作り出しているのではないかと考えられます。逆の見方をすれば、他のありきたりのミカン科植物；カラタチ・サンショウ・コクサギ等は、食している可能性がきわめて少ないと言ってよいのではないでしょうか。

とりあえず、名栗川周辺を「土着候補地」として、今年は調査してみようと思います。末筆ながら、文献を送って下さった松本和馬氏に感謝します。

参考文献

- 大野 豊(1956) 富山県の蝶についての考え方, *NEOZEPHYRUS* 3. 富山県昆虫同好会
 田中忠次(1959) 富山県のモンキアゲハについて, *NEOZEPHYRUS* 5. 同上.
 — (1966) 越中の昆虫, 北陸の自然, 六月社 里見, 他編.
 市川和夫(1973) 埼玉県動物誌仮目録 第3集
 埼玉県教育委員会.
 — (1974) 埼玉大百科事典, 埼玉新聞社
 藤岡知夫(1975) 日本産蝶類大図鑑, 講談社.
 小牧 (1976) 能登の植物, 能登の植物刊行会
 市川和夫・原 聖樹(1978) 埼玉県の蝶類, 埼玉県動物誌. 埼玉県教育委員会.

(〒362 上尾市 向山261~9)

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

浦山谷でニホンセセリモドキ

加藤輝年

ニホンセセリモドキを秩父の低山地で採集したので、ここに報告し記録する。

1 ex. 1975年3月11日, 埼玉県 秩父市 寄国土～茶平(浦山谷:標高400m)

(〒357-02 飯能市 坂石町分 118)

秩父市浦山地方の蛾

市川和夫

県営林管理員の中山登喜夫（秩父市浦山3380）氏は、1979年7月下旬に当地において若干の蛾を採集し、そのすべてを筆者に提供され記録することを依頼されました。ここにその31種と別に1種を加えて本県産の蛾の分布資料とし報告する。

- 1 エゾシモアリスズメ *Meganoton seribae* AUSTAUT 1 ex.
- 2 エゾスズメ *Philosphingia dissimilis* BREMER 1 ex.
- 3 アカスジシロコケガ *Chionaema hamata* WALKER 1♀, 4♂.
- 4 ベニヘリコケガ *Miltochrista miniata* FORSTER 2♂.
- 5 カクモンヒトリ *Spilarctia inaequalis* BUTLER 1♂.
- 6 ホシベニシタヒトリ *Rhyparioides amurensis* BREMER 1♀, 1♂.
- 7 ヒメトラガ *Asteropetes noctuina* BUTLER 1♂.
- 8 オオケンモン *Acronicta (=Apatele) major* BREMER 1♀.
- 9 クロフケンモン *Hampsonidia jankowskii* OBERTHUR 1♂.
- 10 ナガフタオビキヨトウ *Mythimna divergens* BUTLER 1 ex.
- 11 オスグロトモエ *Spirama retorta* CLERCK 2♂.
- 12 モンシロムラサキクチバ *Ercheia niveostrigata* WARREN 1♀.
- 13 フクラスズメ *Arcte coerulea* GUENEE 1 ex.
- 14 オオシラホシアツバ *Edessena hamada* C. et R. FELDER 1♀.
- 15 ウスイロギンモンシャチホコ *Spatialioides doerriesi* GRAESER 1♀.
- 16 ムツマキシャチホコ *Phalera fuscescens* BUTLER 1♂.
- 17 ウチジロマイマイ *Parocneria furva* LEECH 1♂.
- 18 ギンモンカギバ *Callidrepana patrana palleolus* MOTSCHULSKY 1♂.
- 19 オオアヤシャク *Terpnia superans* BUTLER 1♂.
- 20 ヒトツメオオシロヒメシャク *Problepsis superans* BUTLER 1♂.
- 21 キマダラオオナミシャク *Gandaritis fixseni magnifica* PROUT 1♂.
- 22 ピロウドナミシャク *Sibatania mactata* C. et R. FELDER 1♀.
- 23 ウスオビヒメエダシャク *Pogonitis cumulata* CHRISTOPH 1♂.
- 24 キオビゴマダラエダシャク *Culcula panterinaria* 1♀, 3♂.
- 25 ヒョウモンエダシャク *Archanna gaschkevitchii* MOTSCHULSKY 1♀, 1♂.
- 26 キエダシャク *Auaxa cesadaria sulphurea* BUTLER 1♀.
- 27 ウスキツバメエダシャク *Ourapteryx nivea* BUTLER 2♀.
- 28 フトスジツバメエダシャク *Ourapteryx persica* MENESRIES 1♀, 1♂.
- 29 ナシイラガ *Narosoideus flavidorsalis* STAUDINGER 1♀.
- 30 キマダラコウモリ *Phassus signifer* WALKER 1♀.
- 31 フトメイガの一一種 *Teliphasa (=Macalla) sp* 1♀, 1♂.

以上のはかに、1979年7月31日に同所広河原で採集した次種をいただいたので記録する。

- 1 チャマダラエダシャク *Elphos insueta* BUTLER 1♀ (赤羽トモ子採)

=====
=====

種子島紀行 海水浴に行く友人にさそわれ、7月28日から31日まで同島を訪れた。月令5～8日で、深夜にならないと三日月が西に沈まないこと、この期間昼夜ともに快晴宿舎が西之表港近くの海辺、というように悪条件が重なったが、きれいな青い海、美味な魚介類それに親切と人情の深さが蛾の収穫の少なさを補なって余りあるものがあった。

宿から30分ほどの小高い丘の上に、種子島測候所があり、徹夜勤務の所員の方が採集の便を計って下さったので、きっとおもしろい蛾が出てくるものと期待している。（1979年、市川）

ゴマダラチョウの生態ノート

松井 安俊
松井 英子

1. 夏型成虫の日周活動

/976年7月末から8月上旬にかけて、本種の成虫の日周活動について、若干の観察を行った。

観察地は埼玉県久喜市吉羽のある農家の北側延長約/50Mに及ぶ北西に面した屋敷林で、ケヤキ・クヌギ・シイ・ハンノキなどの高木の間に、食樹エノキやネズミモチ・エゴノキなどが低く枝を張り出している場所(A)と、その地点から500Mほどはなれた古利根川左岸(杉戸町下野)の雑木林内の数本の樹液を分泌しているクヌギ(B)との2箇所である。

観察方法は、(A), (B)それぞれの地点で、一定の順路(順序)で見巡ったときに観察された成虫の個体数を数えることとし、これを飛ショウ(占有行動を含む)、静止、樹液吸汁、交尾、産卵などの行動類型にわけて整理した。

観察は/回ごとに20分から90分の短時間であり、断片的であったため、不明な点も多いが、7月28日~8月10日の晴天またはうす曇り(気温測定せず)の日のデータを抜き出し、時刻順かつ行動類型別に再構成した結果を図1に示したが、本種夏型の日周活動は概要次のよ

うである。

午前夕時には、すでに♀、♂ともに樹液に集り、昼近くからは配偶行動ともみられる樹梢飛ショウが活発化し、食樹付近での交尾および産卵行動は午前より午後に多く行われるようである。

全体として、活動は午前//時頃から/6時頃までが活発で、ピークは午後の3時頃と推定される。夕方には不活発化するが、別途の観察では、薄暮近くまで樹液を吸汁するのがみられた。

2. 産卵行動

母蝶は食樹付近を旋回飛ショウしたのち、食樹小枝の葉におり、羽を開閉しつつ、腹端をおり下げるながら樹幹の方へ向って潜入し、小枝や葉表の葉脈上(図2)に卵づつ(ときには2卵)産付すると再び飛立ち、付近で、この順での行動をくりかえす。

3. 越冬

杉戸町下野で得た越冬前の♀幼虫を、自宅(久喜市・当時)にもちかえり、50×50cm、深さ40cmの箱に土を入れて植えたエノ

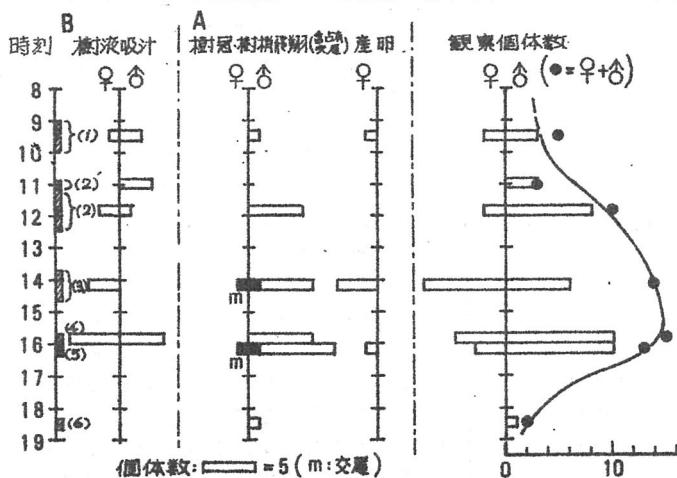


図1 ゴマダラチョウの日周活動

観察日(1976年)

- (1) 8月8日 薄曇 9:00~10:00
- (2) 8月5日 晴 11:00~12:00
- (3) 8月10日 晴 11:00
- (4) 8月7日 晴 15:40~16:00
- (5) 7月28日 晴 15:45~16:20
- (6) 8月5日 薄曇 18:20~18:40

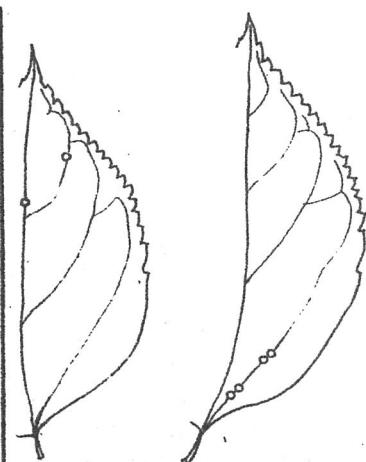


図2 産卵状態スケッチ

(1-VII-'76, 久喜市)

キ幼木（樹高約1.5m）に放ち、翌春までの経過を追跡した例を下記に示す。

1976年10月8日：5exs採集、放飼開始。

10月23日：エノキの葉が黄味を帯びている。

幼虫は台座のある葉の葉柄に吐糸し小枝に固定する。

10月30日：枯れた葉上で体色を茶褐色に変化させていた幼虫が、根元の落葉におりていた。

1977年4月11日：エノキの新芽がふくらむ。

越冬幼虫ははじめて幹にのぼり、分枝部に吐糸し、体をまげるようにして静止する。

以後、ここを台座にして、主に夜間、展開しつつある若葉を摂食し、次第に体色が灰褐色を基調としつつも緑色を帯びてくる。

5月1日：越冬幼虫、最後の1ex、幹にもどる

休眠幼虫が食樹をはなれる時期は、上記の例も併せ考えて、久喜市付近では／＼月末から／＼月初めにかけてであろうと思われる。

また、1977年11月23日我孫子市で、また同11月27日野田市で、それぞれ食樹から降下したばかりと思われる緑色の幼虫を見出している。また、春になって食樹に戻る時期には大きな幅があるようだ。野外で終令幼虫と休眠からさめたばかりの褐色の終令幼虫を同時にみたこともある（29-V-’77, 久喜市）。

4. 天敵

(1) アズチグモ (*Thomisus labefactus* KARSCH)

カン木の葉の間に潜み、獲物を待ちうける伏兵性のクモ（hunter）で、上アゴでゴマダラチョウの胸部をかみ、体液を吸うのを目撲した（29-V-’75, 久喜市吉羽）。本種の他に、エノキやクヌギの葉上および冬期食樹下の落葉からは、ワカバグモ (*Oxytate striatipes* L. KOCH) も見出されるが、幼虫の天敵である可能性はある。

(2) シロコアゲハヒメバチ (*Psilomastax pyramidalis* TISHBEIN)

オオムラサキにも寄生する体長20mm程のヒメバチである。大宮市片柳で採集（39-XII-’77）した越冬幼虫5exsのうち2exsが寄生された例（10-VI-’78, 13-VI-’78 寄生蜂羽化）を得ている。また、データを残さなかつたが、川口市神根で採集（1975）の幼虫をある少年に飼育してもらったところ、約

10exsのうち2exsがサナギに丸い大穴をあけられたということと、これも本種のしわざである。地域的に偏りがあるのか、久喜、杉戸付近（1975～76）、和光・朝霞付近（1974）、野田・我孫子付近（1977）などでの採集個体では寄生例は得ていない。

なおこのヒメバチの寄生は、越冬幼虫を容器で室内飼育したにもかかわらずみられたので、越冬前に行われたことはほぼ確実である。

参考文献

- 1) 白水 隆・原 章 (1960) : 原色日本蝶類図鑑, Vol. I, 保育社. 大判.
- 2) 信州昆虫学会 (1977) : 信濃の蝶, N. タテハチョウ科. 同会. 長野.
- 3) 昆虫愛好会 (1975) : 栃木県の蝶, 宇.
- 4) 八木沼建夫 (1960) : 原色日本クモ類ハ鑑, 保育社. 大判.
- 5) 朝比奈正二郎 他共著 (1965) : 原色日本昆虫大図鑑, III. 北隆館. 東京.

紹介

著者 原 聖樹

ギフチョウの自然史

築地書館 (1977)

（白水 隆先生評）本書は著者の丹沢におけるギフチョウの分布と食草、とくに食性転換の研究から人間の自然に対する営為あるいは自然破壊が、このチョウの分布と成立と食性の転換にどのようにかかわってきたかを、調査と考察をつみあげながら、一步一步とその真相の解決に向って進んでいった経過を読みもの風にまとめたものである。

この本は原始的自然の保全がギフチョウの保護については必ずしも万全でないことを示唆している点でとくに興味がある。

全国のナチュラリストの皆さん、人間のいとなみと昆虫とのかかわり合いの歴史に关心を抱いておられる方々、そして蝶をこよなく愛する諸先輩、まだご覧にならない方にぜひお薦めいたします。（紹介者 市川 和夫）

原 聖樹

（埼玉昆虫談話会……等の会員）